



蜘蛛の糸

Kumono ito

芥川 龍之介

Ryunosuke Akutagawa

Raptor

蜘蛛の糸

蜘蛛の糸

芥川龍之介

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池はすいけのふちを、独りでぶらぶら御

歩きになっていらっしやいました。池の中に咲いている蓮はすの花は、みんな玉のよ

うにまっ白で、そのまん中にある金色きんいろの蕊ずいからは、何とも云えない好よい匂においが、

絶間たえまなくあたりへ溢あふれて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇おたたずみになって、水の面おもてを蔽おおっている蓮の

葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄じごくの底に当って居りますから、水晶すいししようのような水を透き徹して、三途さんずの河や針の山の景色が、丁度覗のぞき眼鏡めがねを見るように、はっきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、と云う男が一人、ほかの罪人と一しよいっしょに蠢うごめいている姿が、御眼に止まりました。この鍵陀多（编者注…カンダタ）と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛くもが一匹、路ばたを這はって行くのが見えました。

そこで鍵陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗むやみにとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございませす。

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この鍵陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報むくいには、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠ひすいのような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸

二

をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになって、玉の
ような白蓮しろはすの間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下おろしなさい
ました。

ごちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しよに、浮いたり沈んだりしてい
たでございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら暗からぼんや

り浮き上っているものがあると思いますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございませうから、その心細さと云ったらございませぬ。その上あたりは墓の中のように

にしんと静まり返って、たまに聞えるものと云っては、ただ罪人がつくかすか微かに

たんそく

嘆息ばかりでございませう。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまさま

せめく

な地獄の責苦に疲れはてて、泣声を出す力さえなくなっているのでございませう。

ですからさすが大泥坊の鍵陀多も、やはり血の池の血に咽むせびながら、まるで死に

かわず

かかった蛙のように、ただもがいてばかり居りました。

なにげ

ところがある時の事でございませう。何気なく鍵陀多が頭を挙げて、血の池の空を

眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませんか。毘陀多はこれを見ると、思わず手を拍^うって喜びました。この糸に縋^{すが}りついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違^ごございません。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ましょう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈^{はず}はございません。

こう思いましたからは、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一

生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、
こう云う事には昔から、慣れ切っているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくらあせ焦って見た

所で、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼる中に、とうとううち韃陀多も

蜘蛛の糸
くたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなってしまいました。そこで仕

方がございませんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遥
かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼった甲斐があつて、さっきまで自分がいた血の池は、今

ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります。それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になってしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。毘陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、かずかぎり数限もない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻ありの行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。毘陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、莫迦ぼかのように大きな口を開いたまま、眼あば

蜘蛛の糸

かり動かして居りました。自分一人でさえ断れきそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数にんずの重みに堪える事が出来ましょう。もし万一途中で断れたと致きしましたら、折角ここへまでのぼって来たこの肝腎かんじんな自分までも、元の地獄へ逆落さかおとしに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でござい
ます。が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這はい上つて、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼって参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません。

そこで鍵陀多は大きな声を出して、「くら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己おれのものだぞ。お前たちは一体誰きに尋きいて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚わめきました。

その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に鍵陀多のぶら下っている所から、ぷつりと音を立てて断きれました。ですから鍵陀多もたまりません。あつと云う間まもなく風を切つて、独楽こまのようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中

途に、短く垂れているばかりでじじります。

三

おしゃかさま
御釈迦様は極楽の蓮池はすいけのふちに立って、この一部始終しじゅうをじっと見ていらつし
やいましたが、やがてが血の池の底へ石のように沈んでしましますと、悲しそうな
御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄から

ぬけ出そうとする、^鍵陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓^{とんじゃく}着致しません。その玉のよ
うな白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、^{おみあし}ゆらゆら^{うてな}萼^{うた}を動かして、そのまん
中にある金色の蕊^{ずい}からは、^よ何とも云えない好い匂^{におい}が、^{たえま}絶間なくあたりへ溢^{あふ}れて居
ります。極楽ももう午^{ひる}に近くなつたのでございましょう。

(大正七年四月十六日)

本作品のテキストは「青空文庫」を利用し、再編集を加えました。

蜘蛛の糸 芥川龍之介／Raptor

<http://p.booklog.jp/book/34655>

著者：RaptorBooks

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/raptorbooks/profile>

表紙画像：ゆんフリー写真素材集

Photo by (c)Tomo.Yun

<http://www.yunphoto.net>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34655>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34655>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.